

国際医療福祉大学乃木坂スクール

2014年春「公開講義#：出会う・つなぐ・変える～発信力を磨く・想像力を磨く」

第6回 清水康之先生 誰も自殺に追い込まれることのない社会へ

いつもドッキリする自殺問題

森枝敏郎 くまもと福祉のラウンドテーブル代表幹事
(元熊本県健康福祉部長)

○「自殺」という言葉を聴くと、いつもドッキリする。

「自殺」という言葉・・・聞くだけでつらい。

私が学生だった20才頃に、関西方面に出稼ぎに行っていた素朴・善良という感じの中学の同級生が失恋で自殺したが、「自殺」ということを具体的な問題として意識したのは、それがはじめてのことである。

その後、熊本県行政職員となって間もない20代半ばには、職場の先輩である40～50代のやさしい感じの女性職員が自殺をされたが、前日も普段と変わらないように見えていたのでびっくりした。今でもその理由がわからない。

また、33才の頃には他の課にいた一年後輩の誠実な感じの職員が自殺したが、亡くなる数日前には、普段どおり仕事の話をしていたので信じられなかったが、後で職場環境が非常に厳しかったことを聞いた。

36才の小国町役場派遣時代には、まちづくりの会合の中で顔を合わせることがあり、にこやかに話をされていた40～50代の商店経営者が自殺されたが、亡くなった後に多額の借金があったことを聞いた。

50才になる前の平成11年には、友人の大学受験前のお嬢さんが自殺で亡くなった。

いずれも突然のことで、大変痛ましく胸が締めつけられるような感じがする。

そういうことがあってか、私は、「自殺」という言葉を聴くといつもドッキリする。

○ライフリンクの資料を活用した熊本県自殺対策行動計画

仕事では、熊本県健康福祉部長在任の平成22年度に「熊本県自殺対策行動

計画」(平成23～28年度)を策定したが、その頃も報道されることが多かったライフリンクの清水さんの動きに注目していたので、ライフリンク資料を入手・勉強しながら、関係機関・団

1

体で構成する熊本県自殺対策連絡協議会で意見交換するとともに、遺児である山口さんの講演を聴いたりしながら計画を策定した。

当時の熊本県の自殺死亡率は全国平均を上回っていたこともあり、自分の在任中にすべきだと思って取り組んだ。

計画書の中には、今回の講義資料の中にもあった「自殺の危機経路」チャートを掲載しているが、短期間での作業であったにもかかわらず、担当の保健師さんの頑張りもあって論理的・体系的にまとめることができたと思う。

○清水康之先生の話聴いて

その後、直接のかかわりは無くなっていたが、平成12年度になると「よりそいホットライン熊本センター」の立ち上げ支援をしていたこともあって、担当していた「お金の「学校くまもと」のスタッフとともに清水さんの話を聴いた。

今日の公開講義で再度聴く機会に恵まれたが、清水さんの実践的・論理的な筋立ては素晴らしいと思っているが、今回、特に印象に残ったのは「就活自殺」である。

子ども・若者支援、子どもの貧困対策は現代日本の大きな課題であると思っているので、こういう話を聴くのはつらい。一日も早く「就活自殺」なんていう言葉がない社会が実現することを願っている。

○自殺に追い込まれることがない社会づくりを

人は人を自殺に追い込んだり、気づきや見守りで自殺を予防できたかもしれないのにそういうことをしないことがある。他人ごとのままである。

その結果、年間3万人の自殺者数という現実がある。極めて深刻な社会状況と思う。

私たち国民一人ひとりが、そういう深刻な社会状況であるという認識を持ち、「自殺」という悲しむべきことがない社会づくりに向け、「自分ごと」として、できるだけ取り組みをして行くべきだと思う。そういう中に自分もいたい。